ピピの旅　　気駕まり

あらすじ
　SNS で知り合った女性との心中に付き合い、意識不明となったたけし。しかし、その意識は体を離れ、一羽の渡り鳥の中へ。たけしは、その渡り鳥ピピと一緒に南の島へ旅することになる。天敵、異常気象、鳥たちを襲うさまざまな困難。そんな中、渡り鳥たちが持つ生命力に触れ、たけしの心はだんだん変化していく。

登場
　たけし　２１歳
　美優　　３０歳
　たけしの母　　５３歳
　たけしの父　　５３歳
　医師　　３８歳
　ピピ　　渡り鳥
　レナ　　渡り鳥の群れのリーダー
　渡り鳥たち

文字数　　４８１３字

〇病室。午後。
　　窓際のベッドに鼻にチューブをつけたたけしが横たわっている。
　　その脇に立つ父と母。
　　窓の外、空高く鳥の群れが飛んでいる。
母「ほら、たけし。渡り鳥が飛んでいるわ。見える？」
　　窓の外を目で追うたけし。
母「見えてるんだわ」
　　母も窓の外を眺める。
母「いいわよねえ。鳥は大空を飛べて。自由で」
父「あれはなんて名前の鳥だろう」
たけし　　（シギ）
母「あ、たけし、何か言った？　口が少し動いたような。気のせいかしら」
たけし　　（飛ぶよ）
母「あ、やっぱり。聞こえなかった？」
　　耳を澄ませ、たけしを見入る父と母。
父「空耳じゃないか」
母「たけしが何かを訴えてるんじゃないかと」
　　目を閉じるたけし。
母（ため息）「疲れたのね。行きましょう」
　　寝室を出る父と母。

〇地上１０００ｍ。
　　鳥の群れが飛んでいる。
　　その中の一羽。
たけし（声）「これは！」

ピピ「びっくりした？」
たけし（声）「わわっ」
　　鳥の一羽が失速しそうになる。
ピピ「人間の身体の中にいたこと思い出しちゃだめ」
たけし（声）「何を言ってるのか、わからない」
ピピ「あなたは今、私の身体を間借りしてる。私は鳥。鳥のことは鳥に任せて」
たけし（声）「どうすりゃいい」
ピピ「忘れるの。体が自分の思い通りになっていた時のこと。そして、すべてを任せるの」
たけし（声）「こう？」
ピピ　「そう。出来るじゃない」
　　群れの後に続くピピ。

○地上１５００ｍ。
　　日の出。
　　朝日が飛ぶ鳥たちの左側から差し込んでくる。
　　右前方に高い山々。
　　頂上に残る雪面に日の光が反射する。
レナ「今からアルプスを超えます」
ピピ「了解」
鳥たち「了解！」
　　鳥たち、飛行高度を上げる。
　　上昇気流に乗り、速度が上がる鳥たち。
　　雲の中に入る。
レナ「上昇。上昇」
　　一気に雲を突き抜け、雲海の上に出る。
　　山脈の上を飛ぶ鳥たち。
ピピ「大丈夫？」
たけし（声）「うん、まあ・・・。でも変な気分。自分の身体じゃないのに酔ってる感じ」
ピピ「気圧の高低が魂に響くのかも」
たけし（声）「えっ、ぼく、魂だけになっちゃったの？」
ピピ（笑う）「心配しないで。まだ死んじゃいないから」

○病院の一室。（回想）
　　ベッドの上に横たわるたけし。
　　ベッドわきにはたけしの母と父、主治医。
医師「病状としては、一酸化炭素中毒による脳機能障害です。それで申し上げにくいのですが、意識不明の状態はしばらく続くと思われます」
母「私たち希望を持っていいんですか。たけしの意識がいずれ戻ると」
医師「何分このような症例は少なくて。私どもの病院でも、たけしさんが初めての患者さんなんです」
父「治療は難しいんですか」
医師「私もいろいろな文献、論文、にあたってみました。決定的な治療法はないといえます。そして今まであるデータによると意識が戻る確率は・・・５分５分です」
母「わかりました」
父「とにかく先生におまかせしよう」

○上空４０００ｍ
　　連なる山々の上をゆったりと飛ぶ鳥たち
たけし（声）「ところで僕たち、何処へむかっているの？」
若鳥１「南。南の島」
若鳥２「楽しいところだって。遊ぶところもいっぱいあるんだ」
若鳥１「初めていくんだよ、ぼくたち、そこへ」
たけし（声）「ふーん、そりゃ楽しみだ」
ピピ「あんまりおしゃべりしない。エネルギー浪費するでしょ」
若鳥たち「はーい」
たけし（声）「あれっ。ぼく、今どうやって鳥たちと話してた？」
ピピ「テレパシーってやつ。あなたたちの言葉でね」

○上空２０００ｍ。
レナ「降下。降下」
ピピ「休憩よ」
たけし（声）「どこに降りるの？」
ピピ「藤上干潟」

○藤上干潟。
　　ほかの種類の多くの鳥たちが餌をついばんでいる。
　　レナたちも干潟に降り立ち、食事を始める。
レナ「なるべくたくさん食べておいて。次の干潟までかなりあるから」
ピピ「前は２日で行けたはず」
レナ「だめだめ。あの干潟は埋め立てられた」
ピピ「残念。あそこにはごちそういっぱいあったのに」
たけし（声）「それって人間のせい？」
レナ「そう。人間のごみの最終処分場になったみたいね」

○上空２０００ｍ
たけし（声）「よくわからない」
ピピ「何が？」
たけし「思いを伝えるときと、そうでないときの違い」
ピピ「伝えたいときは心を開けばいい。伝えないときは閉じるだけ」
たけし（声）「心ね・・・やってみよう。　君の名は？」
ピピ「ピピ」
たけし（声）「通じた。僕の名は」
ピピ「言わなくていい。それは人間同士が呼び合う名だから」

○大きな木の上。（夜）
　　眠る鳥たち。

○早朝。木の上１０ｍ。
　　いっせいに飛び立つ鳥たち。
若鳥たち「ピピ、ピピ、遠いの？　行先はまだ遠いの？」
ピピ「レナに聞いて」

たけし（声）「リーダーはレナっていうんだ」
ピピ「そう。いつも先頭を飛び私たちを導いてきた。何度も何度も渡りを繰り返し、ルートと遭遇するかもしれない危険を私たちに教えてくれた」

〇上空１０００ｍ
稲刈りの風景が広がっている。
鳥たち、里山を抜けて川に沿って飛行。
突然レナが叫ぶ。
レナ「危険、注意。危険、注意。後方にオオタカ接近」
鳥たちに動揺が走る。
レナ「全速力。全速力」
鳥たち速度を上げる。
速度が上げられない若鳥１にオオタカが襲い掛かる。
レナ、速度を落として若鳥をかばおうとする。
ピピも後ろにまわってオオタカをかく乱。
オオタカ、いったん群れから離れ大きく旋回、再び襲ってくる。
群れから外れた若鳥２が襲われる。
レナ「体制を戻して」
素早く列を整える鳥たち。
たけし（声）「あの子は？」
ピピ「残念だけど、これは私たちの旅ではいつも起こることなの」
たけし（声）「あの子、南に行くのを楽しみにしていた。みんな悲しくないの？」
ピピ「何故？　悲しんでいたら旅を続けられない」
たけし「・・・」
ピピ「人間と違って私たちにそんな暇はないのよ」
たけし（声）「人間と違う・・・」

〇たけしの部屋。　夜。（回想）
ソファの上でスマホをいじっているたけし。

〇スマホ画面
ラインメールのやり取り。
美優「あなたと私って何か気が合いそう」
たけし「ぼくもそう思います」
美優「会わない？」
たけし「会いましょう」
美優「駅前のカフェとかどう？」
たけし「いいですよ」

〇海の上
飛び続ける鳥たち
波が荒くなってくる。
レナ「台風が近づいている。ルートを右寄りに変えます」
激しくなる雨と風の中けんめいに飛ぶ鳥たち。
年老いた１羽が風に飛ばされ海に落ちる。
レナ「先頭交代」

ピピが先頭になる。
たけし（声）「大丈夫・・・だよね」
ピピ「私にもわからない。しばらく話しかけないで。みんなの命が私にかかっている」

○喫茶店の中。午後。（回想）
たけしが喫茶店入り口から入ってくる。
手をふる美優。
美優「ここ。ここ」
たけし「美優さん？」
美優　「そう。たけし、さん？」
笑い合う二人。
×　×　×　×
美優「それでね、その上司が嫌な奴でね。私が作る書類、いちいちダメ出ししてくるのよ」
たけし「いますよね、そういう細かい性格の人」
美優「たけしさん、働いたことは？」
たけし「工場のバイトを少し。でもダメでした。仕事はおもしろかったけど、人間関係ってやつで」
美優「なんか、こう、みんな問題複雑化しちゃうのよね」
たけし「同感です」
美優「また、会える？」
たけし「もちろん」

○夜の海の上。
たけし（声）「嵐、おさまったみたいだね」
ピピ「ええ、でも危なかった」
レナ「台風は年々巨大化してるのよ」

○郊外の道路。
救急車とパトカーが走っていく。

○山あいの小道。
１台の乗用車が道脇に停まっている。
その横に救急車が停まり、中から救急隊員が下りてくる。

○　夜の海の上
レナ「知ってる？　台風のように人間の心もすごい力を持っていることを」
たけし（声）「どういうこと？」
ピピ「人の心が出口を無くして、うちへ内へと向かうとき、それは大地を揺らし、大雨を降らせ、大風をまきおこす」

○新聞の紙面
３日午前、なかまき市の林道に停まっていた車の中から練炭自殺を図ったとみられる３０代女性、２０代男性が発見された。女性はその場で死亡が確認され、男性は意識不明の重体。警視庁は二人が SNS を通じて知り合ったとみて調査を行っている。

○上空２０００ｍ
　　夕焼けの中を飛ぶ鳥たち。
　　西の空が茜色に染まり、やがてそれは空いっぱいに広がる。
　　空はピンク色から薄紅色へ。
　　ゆっくりと灰色に包まれていく。
鳥１「人間はものすごく勘違いしている」
鳥２「苦しみは自分だけのものだと」
鳥３「自分一人いなくなっても世界は変わらないと」

○たけしの部屋。
　　ベッドで眠るたけし。
　　誰かがドアを開けて入ってくる気配。
　　目を閉じたままのたけし、が意識は覚醒している。
たけし　（だれ？）
　　第三者はベッドのわきに立ち、たけしを見つめている。
たけし　（美優さん？）
　　無言の第三者。
たけし　（美優さんだろ）
　　立ち去ろうとする第三者。
たけし　（待って。話したいことがあるんだ）
　　ドアから人が去っていく。閉まるドア。
たけし　（もう１度あなたと話しがしたいんだ）

○上空２０００ｍ
　　灰色の雲の中に血色の縞模様が混じり渦を巻き始める。
　　突然の突風が鳥の群れを直撃。
　　群れはバラバラになる。
レナ「しまった！　竜巻よ。高度１０００ｍまで降下してそのあと左に旋回」
　　鳥の群れ体制をとりもどす。
レナ「みんな無事？　怪我はない？」
鳥１「ピピがいません」
鳥２「竜巻に巻き込まれたみたいです」
　　ピピ、意識を失い落下していく。
たけし（声）「ピピ！　ピピ！」
　　反応のないピピ。
たけし（声）「お願いだ。目を覚まして。このままじゃ地面に激突しちゃうよ」

○病院の一室。（回想）
　　医師の前で泣き崩れる母と父。
母と父「お願いたけし、目を覚まして」

○車の中（回想）
　　涙を流す美優。
美優「ありがとう。私のこと真剣に考えてくれる人、生まれて初めて出会った。あなたと出会って本当に良かった」

○上空１０００ｍ
　　雲の切れ間に美優の姿が映る。
たけし「助けて、美優さん。ぼくはもう君に何もしてあげられない。それでも・・・助けて」
ピピ「ああ・・・」
たけし（声）「ピピ、意識が戻った」
ピピ「まあ大変」
　　ピピ翼を激しく動かし、間一髪で危機を逃れる。
　　ピピ、レナたちに追いつく。
鳥たち「ピピ。　ピピ。　よかった。よかった」
レナ「心配させて。行くわよ」

○上空１０００ｍ
　　南の島が見えてくる。
ピピ「私が竜巻に飛ばされたとき、あなたがいなけりゃ助からなかった」
たけし（声）「あの竜巻も人間が作ったの？」
ピピ「そう。でも、その中にあなたを思う人の思いがあった」
たけし（声）「美優さん・・・」

○南の島
　　きらきら輝く水辺で水浴びをする鳥たち。
　　森の中でゆっくりエサをついばむ鳥たち。
　　色とりどりの花の上を飛び回る鳥たち。
　　季節が過ぎ、再び渡りの時期がやってくる。
　　飛び立つ鳥たち。

○上空３０００ｍ
　　緑豊かな里山から人家の多い地帯へ鳥たちが飛ぶ
レナ「そろそろお別れね、たけし」
たけし（声）「ぼくの名前知ってたんだ」
レナ「もちろん。あなたは心の優しい人間。だから私たちと旅が出来た」
ピピ「たけし、気付かなかったかもしれないけど、旅が出来たのはあなたのおかげ」
レナ「あなたの心が私たちの旅を守ってくれたのよ。だから、忘れないで・・・」
　　次の瞬間、レナが羽ばたきをやめ落下していく。
たけし（声）「あっ」
ピピ「去っていった」
たけし「助けなきゃ」
ピピ「ううん。鳥もいつか寿命がつきる。レナの寿命が今つきたのよ」
たけし「そんな・・・」
ピピと鳥たち「さようならレナ、ありがとう、レナ」

○川沿いの野原
　　花を摘む少女たち。
　　空を見上げ、渡り鳥が踊るように飛ぶ姿を眺める。

〇上空１０００ｍ
　　町が見えてくる。
ピピ「あなたが住んでいた町が見えてきた」
たけし（声）「ぼくはなんて小さな世界に暮らしていたんだろう」
ピピ「ほら、あそこ。あなたの家」
たけし（声）「ピピ、ありがとう」
ピピ「こちらこそ」
たけし（声）「新リーダーさんがんばって」
ピピ「ええ。私たちは飛び続けるしかない。どんなときにも。さよなら、たけし」

〇病室
　　たけし目を開ける。
たけし「母さん」
母「たけしがしゃべった。おとうさん」
　　あわてて父を呼びに行く母。
　　窓の外、渡り鳥の群れが飛んでいる。

おわり